

# 逃れようのない人々を支えよう

会報一五二号、更なる第一歩が始まります

ペシャワール会会長／PMS総院長  
村上 優まさる

アフガニスタンは現在、干ばつと経済制裁という二重の苦難に喘いでいます。中村哲医師が歩んだように、PMSとペシャワール会は医療・農業・灌漑用水路事業のすべてを継続し、襲い来る飢餓には食糧配給を行うなど、どこにも逃れようのない人々の命をつなぐために全力を注ぎます。

記念号となる一五一号をお届けするに際し、これまでの温かいご支援に厚く感謝申し上げますと同時に、これからも現地活動を支えて下さいますよう、切にお願いいたします。

## PMSによる食糧支援

PMS／ペシャワール会はアフガニスタンのナンガラハル州で、緊急の食糧支援を行っています。

二〇二二年一月二三日よりアチン、ドゥールババ、ダラエヌール、デヒバラ、シンワリ、ナージャンの六郡で、一八〇〇家族（約一万八千人）に一ヵ月分の食糧（小麦、米、豆類、食用油）を手渡しました。栄養失調児

や妊産婦のいる家族を対象としました。干ばつの状況は大変厳しいので、本来は飢餓の状態にある人々に広く配給すべきですが、アフガニスタンは経済封鎖の下にあり、日本からの送金が自由にできないために、配給の範囲を制限せざるを得ませんでした。

PMSによる緊急の食糧支援は、混乱がないようにナンガラハル州保健局の担当者何度目も打ち合わせを行ない、郡の保健局があらかじめ対象となる家族を把握し、PMSの医師が診察をして配給カードを手渡すという手順を踏みました。翌日、食糧を積んだトラックが配給所に到着すると、集落の長老らが見守る中、州や郡の職員が人々を秩序良く誘導して、配給は円滑に進みました。

今後はナンガラハル州二二郡のうち、同様に飢餓状態の著しい八郡への食糧配給を計画しています。配給実務を担当したPMSスタッフは医師や事務員、農業担当者など一二名で、地域の長老や保健局の行政担当者と協働しました。飢餓が広がっている

現状で、配給の対象を選ぶことは非常に困難でつらい作業であるとPMSの医師は語っています。それでも最も命を脅かされている人々への食糧配給ができたことは喜びであり、それを可能にしてくれた日本の支援者への感謝を述べていました。

現在、アフガニスタンへの食糧支援は国連機関（世界食糧計画WFP、国連児童基金UNICEF、食糧農業機関FAO、国連開発計画UNDP）や国際赤十字も実施し、パキスタンやインドなど隣国も支援していると伝えられています。国連人道問題調整事務所（UNOCHA）のレポートでも食糧配布は報告されていますが、メディアによる具体的な報道は少なく、その実情が伝わっていない印象があります。現地PMSもアフガン全土に関する情報はなかなか得られるものではありません。一方で、飢餓、餓死、凍死など危機的な状況は日を迫うごとに悪化しています。

## 食糧配給に至るまでの経過

二〇二一年十二月一日、現地PMSとのオンライン会議で食糧支援を実施すべきと判断しましたが、実現するまでにやや時間を要しました。実際の食糧支援に必要な資金をどのようにしてPMSに届けるか、模索・検討する時間が必要だったので。なぜなら、経済制裁のために、従来のような

銀行送金ができないからです。また、アフガニスタンの銀行にあるPMSの活動費については月ごとの引き出し金額に上限があり、その額はPMSの事業費の二割にも満たないために、医療や用水路事業、人件費などの基本的な経費すら賄えないのが現状だからです。

資金の用途がしたのは昨年十二月下旬でした。一月に入り、予算に限りのあるなかで、必要なところに届けるための協議を州政府と重ね、具体的な方針が決定したのは一月十三日でした。その後、各郡の保健局が配布リストを用意し、地域の長老たちの協力も得ることができ、円滑な配給が実施可能となりました。

二〇〇一年、空爆下のカブールに中村先生が指揮して食糧配給をしました。その経緯は『医者、用水路を拓く』（石風社）に記されています。食糧配給を決定して一カ月で実施、一八〇〇トンの小麦、食用油二〇万リットル、二四万人（会報七一号）が冬を越せる食糧を配布しました。その経費二億円は日本の人々の緊急募金でした。現地の人々、PMSスタッフ、それを支えた日本人は中村先生の行動の持つ意味を鮮明に記憶しています。

今、中村先生の「逃れようのない人々を支えよ」との声が聞こえてきます。十分な活動資金を現地に届けることは至難の業で

すが、力を尽くして食糧支援、医療、農業、灌漑事業を継続してまいります。

### 経済制裁という傲慢

米国のバイデン大統領は二月十一日に、米国の銀行システムで凍結されているアフガニスタン中央銀行の資産約七〇億ドルを「アフガニスタンの人道的救済と二〇〇一年九月十一日の同時多発テロの犠牲者への補償に充てる」ための大統領令を出すことを表明しました。

アフガニスタンは、昨年八月十五日に復活したタリバン政権が「包括的な政府の樹立、女性の人権の保証」をしていないという理由で、経済制裁が科されています。日本を含む西側の国際社会はタリバン政権を拒否、「最も必要なことは人権侵害を受けたアフガン人の救済、国外退避を支援すること」だと、高名な政治家や政治学者が熱心に語っていました。違和感を覚えた方もおられたことでしょう。

旧タリバン政権が経済制裁と空爆を受けて崩壊した二〇〇一年前後の中村先生の報告を読むと、今回と寸分たがわぬ国際社会の動き・報道があったことがわかります。中村先生は「非難の隊列には加わらない」として、あくまでも苦境にあるアフガニスタンの貧しい人々と共にありました。

アフガニスタンでは二〇〇〇年より地球



2001年の食糧配給時。ジャララバードにて配給を受けた兄弟。(2001年10月26日)

温暖化による大干ばつが繰り返し起り、農業が疲弊しています。二〇二一年は最大級の干ばつがアフガン全土を襲いました。地球温暖化を引き起こす原因であるCO<sub>2</sub>の排出割合は中国と米国で世界全体の四三・一%、米国の一人当たり排出量はアフガニスタンの七五倍にあたります。最も貧しい国が温暖化の被害を最もこうむっているのです。そういう状況下での経済制裁です。

国際赤十字委員会は、国外からの対アフガン支援停止と経済制裁が何百万人ものア

フガン人の生命を脅かしていると述べています。凍結されていた資産のうち三五億ドルがアフガニスタンの人道支援に用いられるとしても、その手続きには数ヶ月を要するという報道もあります。バイデン大統領の語る「人道救済」という言葉は美しく響きます。しかし、実際に困窮している人々に届く支援は限りなく乏しく、未だに各国のNGOは銀行から送金することができません。

以下、中村医師が十数年前に書かれた文章を紹介します。

《狂気の時代である。グローバルイズムが国際暴力主義と結合して、面妖な世情になってしまった。だが、アフガニスタンでは、今に始まったことではない。もう二〇年以上前の「ソ連軍侵攻」から現在の状態は先取りされていた。即ち、文明の普遍性と正義の名において、軍靴が平和な農村を踏みじり、無数の犠牲を生み出してきたからである》。《途上国の一般大衆には先ずもって「市民権」がないことを報告しておきたい。何百万の人々が死亡しても、まるで「市民」のペットが死ぬよりも軽いことであるかの如く報ぜられる》(会報八四号、二〇〇五年)。

《自由とデモクラシー》でさえ、戦争合理化の小道具に変質してしまった。「人々の人権を守るために」と空爆で人々を殺す。果ては、「世界平和」のために戦争をする

いう。いったい何を、何から守るのか。こんな偽善と茶番が長続きするはずはない》(会報八八号、二〇〇六年)。

## 二〇〇〇年から現在まで続く干ばつ

二〇二一年春、当時のガニ大統領も世界食糧計画(WFP)もアフガニスタン全土で大干ばつによる飢餓の危機を訴えています。国民の半数が影響を受け、一四〇〇万人が飢餓線上にあるという内容でした。

PMSが活動しているナンガラハル州のシェイワ郡、ベスード郡、カマ郡では、二〇二一年も例年のように春には小麦を収穫、秋には稲刈りをし、トウモロコシや果物も豊富に実りました。マルワリード水路やPMSが設置した取水堰が機能してクナル河の水を取り込み、これらの地域の田畑に提供したからです。

しかし一歩外れると、PMSの診療所があるダラエヌール渓谷の上流域ですら水が涸れて春の小麦も収穫がかなわず、その後トウモロコシの植え付けもできませんでした。さらには麦の種まきもできず、今年の春の収穫は絶望的です。中村医師は「普通の一般民衆、これは大半が農民でありますけれど、こういった人々が安心して暮らせる状態、具体的に言いますと、パンと水、食べ物と清潔な飲料水、これさえあれば、アフガン問題のほとんどが、わたしはかたが

付くと思います」(「わたしは「ゼロ弾きのゴースト」NHK出版」と述べ、この二〇年間、灌漑用水路事業に取り組んできました)。

## PMS方式灌漑事業という希望

二〇一七年、PMS方式灌漑事業の基本設計が完成の域に入り、これをアフガン各地に普及するために『アフガン・緑の大地計画』を具体的な教科書として提示しました。二〇一九年には、JICAと協力して『PMS方式灌漑事業ガイドライン』の作成を手掛けていましたが、その途中で中村医師は亡くなりました。多くの関係者の努力でガイドラインは二〇二一年末に完成し、日本語、英語、ダリ語、パシュトゥ語で発刊できました。将来、ガイドラインを活かし、PMS方式灌漑事業が有用な地域に普及することを願って止みません。

地球温暖化による干ばつの勢いは私たちの取り組みをはるかに上回って進行しています。そうであれば、中村先生の言う、《野の花を見よ。栄華を極めたソロモンも、その一輪だに如かざりき》とは、新約聖書の最も美しい一節である。国益だ、正義の戦争だ軍隊の増派だのと、騒がしい世界とは無縁なところに平和に生きる道が備わっているのだ。私たちもまた必死だ。世界で何が起きようと、ひたすらシャベルを振る、水を送って耕し、その日を無事に過

「ごせたことに感謝する」(『天、共に在り』N H K 出版) 日々を取り戻さねばなりません。

### 会報ゼロ号から39年

一九八三年にペシャワール会は発足しました。会の目的は「中村哲医師の پاکستان北西辺境州での医療活動などを支援し」、「会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う」というものでした。会員と中村先生の事業の接点にペシャワール会報がありました。

はじめの十数年、命を支える中村先生の活動は医療でした。しかも誰も顧みることのなかったハンセン病、その多発地帯である山岳地帯や農村無医地区への医療構築でした。

アフガン難民の医療者を組織、教育するために一九九八年には、PMS 基地病院をペシャワールに建設しました。ハンセン病医療については、地域展開もあれば、手術室やリハビリテーション施設、サンダル工房の設置など、多岐にわたっています。しかも、あくまで地元の人々の手で運営できる医療を目指したのです。その原則は井戸事業、水路事業においても貫かれており、『アフガン・緑の大地計画』には、心がけた点として、以下を挙げています。

1. なるべく単純な機器で対処できること
2. 多大なコストをかけないこと

3. ある程度の知識があれば、地域の誰でも施工できること

4. 手近な素材を使い、地域にないものができるだけ持ち込まないこと

5. 壊れても地域の人で修復できること

6. 水はごまかせない。水のように正直な  
こと

《アジアの片隅で行われた私たちの小さな努力が、いかなる既成の立場も先入観も超え、共生と融和の新しい時代の流れを切り

## 思い出

中村哲医師夫人

中村尚子

主人が亡くなって早二年以上の月日が経ちました。

あのような形で亡くなったことは、未だ残念で悲しい気持ちですが、私達家族はおかげさまで日々平穏に過ごしております。

わたしは家事をしながら、およそこの四十年間の出来事を意識的に又無意識に頭の中で思い出しております。結婚して数年後、国内で病院勤務をしていた時、パキスタンの病院に赴任が決まり、子ども二人を連れ

開く、一つの捨てて石となることを祈ります」(二〇〇三年、マグサイサイ賞受賞に寄せて) という中村先生の言葉は今後の私たちの羅針盤です。

中村哲医師とPMSによる事業は多くの人々の共感を呼び、ペシャワール会の会員・支援者は二万三千人となりました。アフガンニスタン現地と支援者をつなぐのがペシャワール会報です。一五一号、更なる歩みが始まりました。

ペシャワールでの生活が始まりました。

日本とは全く違うパキスタンでの生活は戸惑いもありましたが、何もかも珍しく驚き、またおもしろくもありました。主人は、病院の診療体制を軌道に乗せるのに必死でした。主人の書いた『ペシャワールにて』を読み返しますと、当時はいろいろな苦労があったことを改めて認識する次第です。私も慣れない環境で一生懸命でしたが、主人の苦労に比べればたいしたことではなかったのかと思います。

現地での生活にだんだん慣れてきますと、子供の幼稚園の送り迎えや、バザールでの買い物など主人なしでも行けるようになりました。主人が仕事から帰宅し、夕食後子供たちはお父さんとお風呂に入ったりにして日本にいるときと同じような日々を送っていました。ただ夏は非常に暑いので、六月